



續都築の系
上



水母橋梁確嚴
法海あり曾向
吾本よかけ
名
ま
乃



梅もよき花もよきせん守 釈迦
の法もよき名もよき命もよき
母もよき父もよき子もよき
の切に様もよきもよき木も
よき佛もよき人もよき

あまのこもよきあまのこもよき
法もよき名もよき命もよき
母もよき父もよき子もよき
の切に様もよきもよき木も
よき佛もよき人もよき

猿越支の原

檜梁准山嶺還

芥川温泉奥行

ぬるりし水名跡をゆく山の日

乙場

水澄ききり秋を尋ふ

確嶺

飛騨のそとをききて雁や海をこ

場

朝日毎の清 穂すきりり

嶺

節遠く旭の光るふしの麓

場

時く〜 寝く〜 妻の赤くむ
 夏平市子使も今ハ素〜 坂也
 こゝろあそび遊の海と遊ぶ〜 来
 毛の口も〜 牛丁平 詞をかきし
 仕切のあそびぬおくり荷をさ
 夏立平〜 宙の流き〜 影もぬ〜
 年のあそび日〜 船不 孫六
 ち〜 登平先の水子松の月
 非の一鹿〜 杏を投也
 嶺 塙 嶺 塙 嶺 塙 嶺 塙 嶺

口指もふ中やぬ 珠々 歯を〜 病を
 雲あをふふ 風もい〜 雲
 何〜 と岩のそつを笑出〜
 岸 おと〜 春長あふ
 検校の〜 海一川を〜 魚を
 舟と〜 降きハ 雲を電のす〜 掃
 竹〜 も〜 ぬ 木辻の 鏡を 叩き
 漁もあ〜 あ 子情〜 も あり
 百〜 一 男の 巻と〜 暮り
 嶺 嶺 嶺 嶺 嶺 嶺 嶺 嶺 嶺

紀舟守を親とらふ声

韻

飯臺の行側くく交あふ火と

山嶺

柿子の頭を三川 紅ふ

韻

阿とたそそくく出まを取うく

山嶺

伊勢もさくぬと悔まてふ

韻

百年も月見ふ良の橋の妻

山嶺

虫の鳴くも笛の孔るふ

韻

見えもやぬ波の秋を伏す

山嶺

垣根くくの日和と海ふ

韻

西の雅なきはきあつた組

山嶺

鳥居の丹々袖ふさつ

韻

おとも茶ん声あきむこ後まて

山嶺

流生くきり 懐の吟

韻

二井宿湖月亭

山原のふく千も寝く桔梗うね

碓嶺

鳥のあく音千消ふ晨照

文河

岸の火のたゆも寝さ秋あま地

嶺

留のまはりの皆空に

飛らりも飛らぬ螢の涼に

青田の色の後子母の戸

吉門とくを吉次くあゝえり

旅の衣のさめくふ幸

跡のあきこ後子母を後子母

情のあはれをかきうま

線香の賣りまふ斗の小鹿

柳のまふまふの涼

河

嶺

河

嶺

河

嶺

河

嶺

河

なと後子母の鳥毛月

礎を庭のわらう

何となくとを的り

年々あふか茂のま

人声のさめりむの

正殿のまをり

牙のまを鏡に照

おまのわらのまを

西念り嘆を水

嶺

河

嶺

河

嶺

河

嶺

河

嶺

拾着 ころは推の下階

四 竈 伊勢より来り鳥居し

二人の客う一人 眠るふ

身洗ふ人の住家と持てし

霜のちり移る世をくふ

萩よりみほり戻るたふきハ

三 返ひ虫のそくく 飛

三日月子相撰の祖の定りも

篠ふ墨子の寝くくろぬる

嶺

河

嶺

河

嶺

河

嶺

河

嶺

雲おもて往連ふさちけ折くに

鉛の鳥をの銚を 集ふ

雀より先一掃よりえろえ

大工の頭り、屋敷下さふ

米より水も毛の香を引て

如月より川あふふ頃

河

嶺

河

嶺

河

嶺

黄鳥の目し本り唱茂る那

風あやりふき夏のあを影

碓嶺

吳山

紹鴻う旅のあふ一戻り来り

業やもやうと老をこぼしむ

三日月ハおとの中へふく秋の月

帰ふま鳥の宿のあふむ

霞のたしとぬ男の寺建こり

和日そこのり門を風を焚

木の雲の消ふやうに子燕衣

夏ハ昔蒲の使り何

昔のえさう淋しとやまふ板底

月見ふこゝのこ見ささうと

鳴子曳来ハ千も移ふ居り代や

潮 寒くさふ菘菘の味

森起り草鞋をさう小山伏

笠間ハあゆりこり降早

太箸を墨さうり思ふも笑さう

襟の熱りさうりの重ゆふ

陽々の小貝あつたふ波の跡

西子入ふ日を許し 丘達

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

飛鳥の若草山をこえりきハ

二

鐘の引きも十月の春

嶺

系ふくまう海のうきを捨てる

二

衣子かくやま思ふ世ハあや

嶺

及らざる車をあふを垣下

二

非くと蒙ふ人のあや魂

嶺

夢やねの下ふやまうきく板の声

、

月ハ木の洞を照らす頃ハ

二

樹の底鳥の見送る橋着る

嶺

不二見ふ思もくこ下後ちふ

二

親船り並ふ小舟り火あくもて

嶺

白つく米の虫も這やふ

二

留王一人の僕もまきんを

嶺

手え下アア平出筆一描

二

咲くふ花と着物の揚るんを

嶺

春の葉の消ふまのまふ

二

親ハ子ヲかくもく鳴る京吉る
確嶺

友の雲の松子消多ふ
古翠

春入ふ菟弱白をこぼるる
北徑

雲の雲の移ふ手の平
嶺

瀬もあえて月の流るる宵く
翠

秋の白ひの移るるかやふ
徑

梅子の命を乾す火を林ごと
嶺

秀句を新ふ泊瀬の山寺
翠

張む豆の及古平もくはる昔うぬ
徑

千鳥の浪平もるるの移るる
嶺

雲のさふハ重ぬるるの便あふ
翠

鉄槩けふ日も人よまて
徑

二人まふ外平又まふあふる賣
嶺

市の散るる縁野寺のり福
翠

雲の引くくさのふのさるる
徑

鳥を張ふふる鳩のえをゆく
嶺

月むふ小鏡の溜る紫の戸や
翠

萱草の葉もさかすか

徑

蓮如忌の人すもよもよと押さへ

嶺

母も尋ふ棟梁の里

徑

雀ももろろ星日のくまかり

徑

影の下りてあぢふ飯橋

嶺

五月雨の跡もくまぬ井垣ふ

徑

うすぬ螢のくまきくまあふ

徑

山鳥の宿りり山すゝ燕たさす

嶺

こゑも甲斐の水すくく免ふ

徑

名もまゝぬ仏の茶さかす

徑

庭のさくさくや月平ぬる

嶺

薄りも秋平もくまる小孟

徑

ふふこ引くく返る又ふ

徑

お母子のこのあぢふ村は

嶺

晦日くくく屋の隅掃

徑

驚の名の五位の祝と指さくも

徑

おれの別の葉くくくゆふ

嶺

さくさくの奥の細くさくさく越

徑

はくさの原を再興の春

任

春句部

上野にて

か鳥や根強くふも一様うら

上毛

雑周

穀を系やさくぬきとも睡安き

壺半

千代くく雀もさやせ雪あふ

若水

聖を志も目か友数りさふのちふ

江戸

廿九丸

あゝ多笑むさし見せぬさかりん

護初

鯨突く七浦むつむ柳うら

蕉多

松もさぬりちやうの家

素撰

つ橋や今見し宿をかむ

菜場

も益人ともものりな宿あきん

尾原

东阳

あつちり怒る水干さつむやもの家

作者不知

春橋や思ひとせり海の声

塊翁

玉川子と座も墨あやさる実

下毛

かき成

あさけのむもを新しぬさうぐい 下毛 魚辰

元日も日永くさふやたく山家 素考

正月の柳ハさふそ手車ふれ 長考

病後の茶目

仕合子、瘦多もを可一衣そあ 昔三

あふや描ももさくさけ玉筆

草の戸やあももあきくちう梅

あふ家より米守も送りぬ

草一な年あつあしんちふの春 才次 古習子

押さきう柳手折しんを糸の中 乙韻

梅や只日了見ふむ子阿ぬん 道夜

あふ中もや宿可待進ふき子白子進

あふなる大暮のちをやかすむ 信長

春をゆく不二のまう雲出りたり 素築

あふあ標さるあさやゆくおふ日う 冬扇

あふあさ草らりさふあ子あむが 桜白

あふあさ筆さるんさふあの宿 龜蓬

あふあ松島はさうりう後 柯香

聖の日の原委くありぬ木葉附

酒田 左母里

あつらひやこぼしのついで夕柳

知足

那ハふらり、春さるるの月ねん

哲夫

松の葉の月日こそまよふ春寒し

吉耕

あーるるの舌の赤さやそふの風

五弄

さるるや山の多しもさうのたぐ

相木

松の葉子、多かりねねや存る

阿息

ひさくく、後の持るいうかき

河道

を教や、ねの浪ふむ鳥のこ

長野

草庵

春のこむ、はつり蝶まし

喪中

ふき親のさあ、待ん 宝 船

米沢 曉花

二のるま、月ち、ゆや、梅の宿

乙韻

以後の友、いさりや、梅のそふ

志省

あつらひ、をめき、ふりか

鴻

かき、ふら、ふも、あま、山のそ

呂童

月のもふ、あま、も、さ、さ、さ

六川

落久伊や 蛙うぶの 振ふく 何

米沢 以山

云下り人の 泥え 祿うら 柳代

江ノ 寒松

むり 糞すふ 鳥も せぬ 雀うら

改日

そふ 雨平 見 雲 舟や 神の 小室

ちさ

水底の 見え 中し 蛙 可ふ

蕉雨

むと 夕平 清ふ 月 ね 可解

鶯笠

雪平 柳 袂も あり 暮平 急

靴山

氷平 山 あり ね 糸 可ぬ

雨頼

梅 せり 霜 あり 青く 可ふ

應く

う 海 浦 子 の ち 墨 日 也 さ 可 ぬ

君安

この 子 の 生 も 日 暮 し 可 ぬ の 月

乙二

一人 都 起 る 後 可 ぬ 梅 の 宿

、

海 苔 可 ぬ 荒 も あり 蛙

、

そ 子 可 ぬ 従 身 可 ぬ 梅 の 可

武只 又玉

云 あり 柳 の ち 可 ぬ 可 ぬ

玉芝

思 可 ぬ 兵 造 作 可 ぬ 散 さ 可 ぬ

素白

月 可 ぬ 思 可 ぬ 可 ぬ 可 ぬ

古言

黄 可 ぬ 可 ぬ 可 ぬ 可 ぬ

曉真

姓あつち月さけ山り糸の後不

武貞

高山

み米のもや敷りもさうの海子心

七人

甲二

宮根山

宮王の袖もあつちー花さちこ

道彦

おふやまーん房すゆーさつる越

旅すきいさー傘一燕一又柳

もの夏木の根す浪もさつる

小夜の中

春をか〜〜老とさ〜色ふ又越し

碓嶺

お鳥や一本の間あつちも人すさ

巢非

朝の石や梅見さつちさつ老り老

さ你娘や〜さ丹塚も有あ〜り

ツカロ

玉之

鼠尾草のたもあ〜ささふ草代

梅ら香すさ〜ひさるねはふり老

五友

あ〜清ふるも降〜さ〜董さ〜

カメ田

龜山

式部〜い涼さゆ〜り物〜藤のむ

酒田

美杜里

飛鳥の海さ〜の〜風のさるさ〜

龍也

〜さ〜心やさ〜の〜年ふも風〜の〜

昆明

三日月をよみ縁起しつゝふ小鮎代

三楓

寂しうふ親をたたりまのる

与雄

黄鳥や二月詞 せうかまわり

秋田 永交

一足も旅のうたやそふの子

素蝶

麦畠や月のゆゑふさるの暮

民児

さう雲煙ハ手もむすさう

信及 武日

しる梅菩提の種をまく産孫

令徳

衣里や草鞋とく身やむす

一調

おやまのしおのふのむす照

可厚

足曳の山家のそとや 楓の紋

希言

長崎より

む敷や是のうへを旅の道

葛三

おゆきや結ぶ大事やとら梅

富根路のくま集やそふの月

りそや 甚凡本の弓の引つり

江戸

手りさそふ程ふはそふの月も

万里

黄鳥と思ふ日おもひつたり

平馬

昔そふや水と鳥も親とふ日

可丸

そふりん墨きんハ昔も凡あり危

江戸 荻原

寄花巻

鳴子釣子花子位牙ハ鳥可那

孤山

川そら物 雨中やうら花の未

九折

まつ甲のそふりハまつり伊吹山

曉河

サリ世留手子ハ中やハまゐり

秋身

おめ是ハそふりも世の行きも

頑布

あゝこやうあらの春子あゝ畦

詠取

今年子も世のふり出まも 松の内

掌筆

ほろりも小言世こそ也ハ藪の野

可丸

苗代のおもあやこゝの親の手紙

道彦

序都の山

老まるらみり多母さハ春の草

奥及

西月の月夜子松ふ原可那

文々

孫やうの中の花やむの曙

亀丸

押出すや 朝日を横こもの雲

信及

冥々

鼻かんさうせり常ハ月明り

梶芝

え日やハさきハ年をかえりて

梨公羽

時必不取害

春をゆく風平ハ花の咲きを

碓山嶺

まき翹ハ土のゆるみ小雲あり

大印

るま回んが家の下ありくわ小雲

道彦

ま原さや大木をわりの繞り

山里のむせ和忘をふちのむ

江戸

二月の神々後けく梅のむ

國村

若葉はむ手さや鳥の隅田川

下総

紫月

利木のむせさくも先祖の百年忌

雨塘

寺のむ水ハ澄とるもむき

梅史

森とるハ霧いぬさくむ見

雨塘

晴とるめさくもあやとる空

下毛

菘六

とる浪のゆり出はるのらむの子

手太

吹葉ハ野ハ青む時逢さく

危あ

ハ鬼山や水の中よりかさく董

陶里

とる雑声とる後とぬきあふ

上毛

中島

散出ハる人すさく山橋

阿多

散出ハる月す後すぬ山

上原

くわのこものニ夜もくふやう露

京

梅價

露あしんけの柳の青き夜

雪園

ぬくねハれこのえさ色 祇さくく敷

雪雄

黄きもの露る木も持けたるの月

近江

鳥頂

那ふる一ツハあきやう家の月

丹波

武陵

芹青く不ちく 落る木の雲

アハ

鶴里

あの手の雲をさう家さくく風

大坂

万和

おのものを敷くも見えは敷く急

長高

長生の山見るくふや 雲の春

ナカミ

雉啄

けり今をハを平 志つすふ河 べん

成美

於日雲 六浦のとなと今や たく

菓非

家子七ツと風 三島をもちぬ

ねハ夜くも 志き花几巾の墨所

乙二

くう鳥や 死ぬ日 先平 ちふん

山吹や 笑指るふ 襟のく

米沢

松徑

辛崎の松も 美咲の春の春

山里ハ月き けくも ちあかり

乙塙

目かきも 何ききや 直方 柳

曉花

芥子の香の浮きやい出るる流るる

米沢七人 仙舟

草の戸や又たふるる日の子ら

そふ風の重なりぬる也菴く都

雛子あはれや梅を折るる歸るる

井久

さくらさくらり出るる月さくらさくら

沖の子やい出るるももももも

如月の木やももももももももも

梅さくらやい出るる月日の面あは

三回忌二句

陽々をいそ侍やいそ家の敷

井久男 夷白

梅の香やあはれい出るる松の影

梅祥

衣の影の衣中燭やい出るる梅の影

七人 梨暁

ちふももの影あはれい出るる雲の中

葉文

是中此月もかえりあはれい出るる

心路

敷のこふもやい出るる影あは

うたか

衣の影の影あはれい出るる木間の影

東家

ちふもやい出るる中月の影あは

松茂

垣あはれい出るる影あはれい出るる

斗力

黄を甲にまゝく青を竹の節

米沢 素合

風の色々の色をく柳の節

梅里

傾城の賀

赤人の眼をハ董う森ふ一板

乙二

赤あやや死く振くをさふに森し

足えの衣解ハまゝくはまの海

米沢 葛三

まゝ板の音やまゝく竹の梅のまゝ

米沢 疎竹

もや月照るハ昔をくふの月

テハモカミ 楓二

まゝまゝぬ人のあゝ風衣の節

一洞

竹の葉の音をを森の別うぬ

桑五

草の戸を飄おくりぬをふの月

杜陵

白魚のまゝはまゝををふの梨の

何出等

草柳やまゝ面の星のふり移る

礎文

まゝ風ふねををの別うぬ

境水

誰あゝまゝくハまゝくハまゝく

一止居

中く寒く月をむけや誰あゝ

淋山

松雪をまゝく寒くハ月のをくぬぬ

後二

黄鳥やまゝくハまゝくハまゝく

米沢 後二

思ふるしふきぬるありはく姓 道彦

つく舞やを根の松を掃おはる 葛三

雛子ふくや一人のあ子を里使 鬼丸

風子のふきまのこはゆも見は 幸緒

松風のおとすふくや土筆 里川

む辛夷日のあふおもをぬり 友比

阿りまをそまを志望鳥もむまを 飛岑

若のたの外り何色をうたはく 柳く

待燕のおまをふくやる柳くぬ 巢北

若敷や雪より人子白ゆすも 對阿

相河ふみ月を月夜や若ちふ 佐平

雑句其之部

黄鳥の老き後あり高臺寺 道彦

あけの日の目がとやまの川也三上 江戸

三日月や昔年湖の風を薫 利雪

敷るまをうらむかき後る牡丹 圭美

家子居き見り子あり社若

江戸

碩高

此上の祿ありあき不二詣

玉光

蒼鳥の眉中ちいさく風早

紫岳

小田系子醫者のまきや不二詣

一蕙

川あそ吹杖屋のたきや立位の色

世篤

交りした手とやう菜の赤く咲

又貫

廿路畑と月のまはに荒りあり

史子

あゝあゝ返す日づくー花のを

黙高

そゝあゝあゝの能くやあゝの心

護物

木練りかきまきや風の道

荷乙

と一坐うく渡りやも若柳

雪彦

かゝる日も暮るきやけしん給

久藏

軒のま下きする頃やくゝあき守

得三

おと日の見えてもかき草阿おめ

董高

声子色の花ありやや時を

虚白

やゝもさくらやけしんあおし時を

一高

月涼し人まきり人の声を引

又層

かゝるもさくらやけしんあおし時を

桂造

鴉の欲のまのぬき人可憐なり

かんこもあや重なるの写す

菴を出る雪程白く芥子の色

きり敷て外より中へお伝代

春鳩居士を以て

八上里津さかふる真夏を土つる海

後ねや達しのあめの茶一盃

刃の上のなや一葉の一般さふ

中へもあや月ねり起て蓮を切

長女

泉北

成美

葛三

解いさのハ生何なりも津の福せん像

昔の鳥のあや見そ居る故き

退屈の後り安さるるを

かふりもあやるるもさるるのな

六月の懼りくふ子ものうぬ

ちの母りあやるる後を自年月不

ふちるるあや北斗の影をみこし

かふねりあやるるあやるる

若菜の若の夕白もむとく平らり

秋田

巴陵

御風

可美

渭江

木子

米沢

和春

吳山

文河

女

涉香

まつらぶこの阿中の且やかきつる

米沢女
こちら雄

雲をさすもく着るもく旅の宿

葛三

松竹をたふしそそ居ハあそびあそ

螢火の行方りそそ居ハあそびあそ

惟木子藤花んまろそん牡丹

赤きそそ居二川のゆの果なる

三日月の入ふ中そそ居ふ田ん

三夜二夜あそびそそ居一人の家

雲の山峰ふ川に青き世界ん

白雄
赤手
長歌

乙二庵を尋ねる

十年逢ふも百年の恨あそびも
一宿り十年の夢ひをさそ居そ又百年
のそ居そいそ居そ見そ居そ又
若し松柏いつまの老を語そ居

さふハあそびの昔そ居そ居そ居

一川花螢麻しやそ居そ居そ居

秋をさそ居そ居そ居そ居そ居

白布のそ居そ居そ居そ居そ居

松竹をそ居そ居そ居そ居そ居

行そ居そ居程ハあそ居そ居

上毛
旬光

下毛
芽丸

道隆

幽人

京
若丸

菘かきと亀の白田くちりまやさるーの志 上毛 菘儿

ふくくさな雲のそまきぬいそそい 一

やま丸の妻とくさくさふ采古る 高頂

涼ーさやまのふゆふ田川 江戸 貫

和のすくまねハネー若く時 貞秀

夏山のすまゝハあゝの将可那 倫市

麻の葉と板のくさくさや樽 津カロ 釜湖

一まじりありー澄たり流も苗 西河

夕鳥の宿平かえり歌部をもち 百泉

きーの花ゆゑ重き牡丹代 昭季

夏涼ー大銀屑五弁何の菴 春潮

雀等すやみふら竹の極細ー 樗山

霞あゝあゝくさくさ若柳 草坡

昔の白水益人も出たり 長安

ゆきとくしりふゆいさくさ 下総

香煙のさふもまらうー雲の峰 李峯

まろくさの隈あゝーきーの妻 かつ丸

竹植るも見くもひりあは 三河 秋峯

戸口中々不二の純神也社若

信貞

彦山

おまふ浪のきくに暑う解

治泉

山のあまも後ふさの帰る四月の風

菅古

ふぬ帰老を結さりたのこあふ

兼成

燈籠のやもあまぬねうつろあふ

樗白

杖竹をささるあふやそこの福

一葉

甚の香也袂す重を結五十

石鏡

男娘いつをも昔平すふもさう

板長

途ぬのままふしねるの中

下毛

昼魚の不二をありね古

常貞

李尺

四の五器の上やうふく物昔花

風実

ありくくくくハ敷たる芥子を

丑子

石海

雲千枝の起くね不如得

東陵

舟の若也遊ても墨のぬ墨の家

吟糸

宵こをも舟月やや山の日

蓬松

給着く人や四ふく泉岳寺

东家

青柳も草と茂るねつろあふ

起得

長谷寺ハ板も実生や昔のそ

中々

酒田の富りやう

あ里も思ふぬふさう粽とく 乙二

葎の葉を引ついでる暑が 乙二

筆や大さうあましく 仁の日 雉啄

あくまのくふ草物 杜若 野物

涼草物 たりもけさるるを 岳輜

黄鳥の年寄くさし 推のを 柳く

い舞入の揺ふ日とを 若さる 乙塙

海人さすの土ぬ暑く小松る 吟あ

五く石や 五く草の秋の影 乙韻

おのゝ秋の層ももさし 花螢 古翠

餅や何れぬ鳥とく 鶯鳴鳩

伏家とハ行秋の念ふも 松徑

妻をいひて

散るる後きも一里と思ひり 季 曉花

散るる見つゝのすふや 萩のを 碓嶺

まつ草物 静く 人の上 乙二

黄鳥の老さすも 来や 池の坊 乙二

七人

青楼

枕より川常と何故おの明安と 長翠

きふらりもせふ遊しや若楓

蛇牛の鳴んとくまんと小る降 井久

卯の若や粟搗不よの明る降 曉花

おまふちふふ交と角ふき蛇牛 瓢花

野の子とふあ八月より涼し 窟水

明結も江くもや鴈鳩 寄牛

おねの中の月おや不ぬ留 可明

緑の葉は葉を口舌もふこなる生 扇柳

昔のをも笑ひ季おのぬり不ぬ 古翠

おの面の細ふあふ色峯の松 熊眉

と切や水はまのうと流るも 寸龍

相さくや映とて後の只も飛居 良左

草の戸より身はまのやと 白推

振子や重ふあも昔あし 薫履

手届り旭あさ 路眉

雪映しとてとて雪もと長く 春菴

水あちくさ 螢肥こし 垣根草

ムツ 方耕

茂草ふさふさ 土のうらみ 日影中 梅柳

豆丘

若柳 漆ん葉 さらさら 家系 ころもふ

道彦

行く子 黄鳥の世 びんびん 心取

長智

あそぶ 水鏡 月のあそび ねむる 夢遊

江戸 南井

そと きの 老を 上里 移家 土手 月夜

曉河

傾城のナツ びんびん をかき 草薙 風

米沢 士清

うき びんびん あそぶ 下を 氣 螢

英里

鏡ふさふさ ころもふ 土手 移家 月夜

島桂

松更さうも 揺る ねむる 月夜

方比

交富いふく 庭の 花を ねむる 月夜

七人 長昌

えやや びんびん ねむる 月夜

郭公 びんびん ねむる 月夜

栗谷

白き びんびん ねむる 月夜

柳

夏夜 びんびん ねむる 月夜

モカ 瑞元

江の上の 友や ねむる 月夜

米沢 李堆

女 びんびん ねむる 月夜

雄鳥

水鏡 あそぶ 此持 ねむる 月夜

雨考

茶句秋之部

みくほもろく月ハ生色く照る月

河道

墨水舟中

志きり汲みり何く福と秋の水

佐平

あそ鳥り曲りくちり柱り風

^{カノ田} 堂城

朝鳥や咲みふ回を花盛

歌木

雀の子の世ハ美く星の光

^{米沢} 呉山

明月や枝の声くく交りぬ中て

杜明

秋もきや鳥のおんも未枯く

^サ 海香

土の中ハ飛り早く秋の暮

文河

塩くはりきり

あそ鳥後一木のるの秋の影もこ

^女 雄島

あそ鳥也二後の先を人のつ

人の世こそ見みたるまきともたらが

左耕

世や秋や葉もも限あふものを

李堆

大方の家ハ留りぬり花 柳

柳

大切なるを盃に山あり

米沢 疎竹

白子社頭奉納

人の世をくくぬきや葉のま

朝白やをむふとも子ハ

秋田

五頁

川を妻やかつきさき

かつ

三光堂

家の方々所々

乙二

名日や人のま

無きま年

巢北

秋香

乙二

かく

宇部

お

日人

抱

三

あ

三

盤

スカ川

士

了

多

日進し 途々 行ふ 途々

スカ川 馬考

深山あり ふたを 昔の 秋の日

耽二

白雲の 影を 舟に 苔の 庵

南詔 煮籠

秋の 初め 下も 風の ちぎる

南詔 素々

落る ねる 音を 家あり 秋の 心

洋口 とも

を 舟に 遊る 宿の あり ぬ

京 星詔

雀守の 心を かくす 梅の 葉

丹波 梅價

おぼろ 舟を 橋の 遠く 写す 子代

丹波 武陵

ふり 秋の 心 二日 三日 分

池田 吳光

けしき ぬ 小室 一 ちが せ

信及 ちが三

是も 雲の 数多し 一 ちが 香

石明

秋の 心 音を 舟に 一 ちが

柯雪

いつ ちが 秋の 心 舟に 一 ちが

玉蓮

舟に ちが 舟の 舟に 一 ちが

枕る

中は ちが 舟の 舟に 一 ちが

硯石

ちが 舟の 舟に 舟に 一 ちが

野指

舟の 舟の 舟に 舟に 一 ちが

亀太

山寺や 栲牛 啼き 稲を刈

信及 八朗

秋の山を 刈り 稲を刈

長家

あそ鳥も 啼きの 稲の 別れ

此日 数人も 老り 季の ちの 月

月ニ ねく ふう きの けい げん

下 稲の 玉 稲の 葉の 色

保吉

盆の 月 人の中 あり けい げん

葵童

ま ころ 秋の 稲の 葉の 色

春時

阿そ 鳥の 啼きの 稲の 葉の 色

巢居

庭中 母の 栲牛 啼き 稲を刈

五明

あそ 鳥も 啼き 稲の 葉の 色

葉の 香や 不二を かき 稲の 葉の 色

江戸 巢塙

詩の 子 稲の 葉の 色

あそ 鳥も 啼き 稲の 葉の 色

赤の

晩 稲の 葉の 色

尊皇

人も 刈り 稲の 葉の 色

孤山

金令 夫人の 病 床 下 天

おを 刈り 稲の 葉の 色

確山嶺

掉りたり不二りたりもや天の川

江戸 梅雲

ちの母の身を等弁不存実く風

栄枝

名月や縁りかき墨糸の鹿

幸雄

まの秋のうけ蔭蔭ふとくふふ

岐日

身一りたり思ひやささの秋

曲阿

松蔭や秋りくぬふ枝の露

廿 周来

阿の白もあつて雲さき垣根代

孤山

魂撫りあけ秋を高く歌

竹三

秋まや声存ふその身より

卓光

麻きやもささく米を寺の秋

市五

まきく見らぬ日おろ雁あつふ

利喬

まの存ゆ草りらを墨やふへ

大塘

まの秋志はるもも夕あゆ

芳洲

秋いま秋のふりむあつとひ

孤獨

足洗ふあり後りやめくむ

表下

仲秋毎月祈禱

あも綿りもふゆの程もあまゆ月

道彦

か得るふのまりもくねもやうそ

、

すもむしや 紅葉を深ふまの音

道彦

三十四

父の十三回

つもふ秋秋の白髪千仞く斗

乙二

高館十三夜

夕陽こぼる月ハ昔年ハ白

際紅霞の消るもすやあもい

見ぬあやうくも千仞ハあゆの秋

有菜

秋の草牙いろ色程千老もやぬ

米砂

月のあそちふおさりくもあり

呂律

貞徳の富所数あはしり

蕉雨

あそ鳥の志の上平も多川り

菅子石

星の糸ハく雷の轟のまのを

九朴

草多丸くかく秋千ハあり

魚文

秋の日の輝くあつや

里丸

あそ鳥やあそ草本も旅のその

秋あ

あそ鳥やあそ鳥ハあつや

泉北

あ秋さくやあつやのふえ

相のあそもあそあ

恒丸

日影平かふもさひくう菜のむし 成美

鼻あかむもあめの産しきるの音

菜大根の日和はくは秋のけり

能家の垣うきく川かきけり 葛三

名月すほきしよの夜葛あつ

枳賣の心の中をすふ日ねえ

まろ人も伏見ふおぬねえ

象階ハ層のちあふふあやゆ 長翠

稲妻ありの衣を過す海草が 白雄

後にも見てもおきり有秋の月 完本

盆すふおきりおきりたる草枕 希言

そつ雁ハふ飛しらのえあつ 可起里

いつ見てもまひあつ秋の月 樗堂

かきたりおきりおきり秋の日 大坂 月居

秋のぬきくくぬきくおきり 夏及 一 瓢

稲つちやいつくまぬしおきり 下毛 百樗

伸ふ程らの様しおきり 芳竹

阿そ鳥やぬのえらの涼ゆめく 北岱

みぎかのりちりりちりり 秋の音

江戸 碩高

り秋や 素吉るる 浪の音

道彦

死きくふ借るや 昔のむ

ふ流きくふ借るや 昔のむ

米沢 藤

秋のこり 筆ふほくま 秋のり

柳史

村のの 秋のぬ日や 須戸の秋

乙塚

くく 枯や 菟につくもの 祢ゆり

里秋

ふの空の 後さくも 男むが

猿曳の 狐差さくや ちふ芒

盤山

ちり秋の ちりも 追 後の日

曉花

二病後

又ふのこり 春はさくや ぬの日

あふの ちり 秋の ちり 芒

古窓

いみじくも 今を思ひて

秋のこりも 心さくはくは ぬきさくは

星の 秋の ぬきさくは ぬきさくは

童二

見るとさくは ぬきさくは 秋の 暮

山あ

まふさくは ぬきさくは 秋の 心

柳

むの香を吹くー ねり秋の風 米沢 以才

澄月やふいほほきききききききき 三ヶ色

廿秋平凡も声もりねと事ぬ 之仙

きふの月やあふふもほほほほ 、

夕の秋の骨はおーぬー葉のむ 、

又月や人よりーく日行くー 何耳

何のぬねを舞きききききききき 、

あふの上り重ふ秋をひり信 、

秋く川やもふ風雅を思ふ時 、

おーきの念ふーあきと散せ秋々 井久

ねねーきき月ーふきききききき 、

けのききのーきききききききき 才呂

ねのききーきききききききき 巴白

ききききふふもねねねねねね 大遠

ききききハのききふふきききき 本庄 乙彦

あふ鳥のきききききききききき 巴は

眼平ーきききききききききき カメ田 富山

きききききききききききききき ふ雪

2111

くく指や秋も鳥のたぐふ金に

カン田 恒事

七夕のころかえりあまの秋の月

尺路

一日も吹の指をさむく秋の風

蕉布

松のまふのくく麦あき果の秋

米沢 曉花

薄ゆやゆきも菴ハ結ひたる

惠峯

所思

身の秋くく魚やせりむ雀

、

この虫も生色合やさきふの月

了休

晴際の上まぬる降し紫雲

船も

指みり紅まきり法砂

椿砂

くく盆や只一枚の草

五雲

月と日さをさりけあまか

七人 樽白

大空を雁の道く月ねる

指月

扱一りくも森さく

二并言 暖山

おとも降あをひのちう惶

潦水

右内秋見定川

荊口

夕曇の秋の涼や

嘯泉

招の蕙さむ限や

秋のさき 志きり

留の音平な跡あや川石の月

二井高

東嶺

風も影をわすれ秋を山前葉

棠舟

松柳の影をわすれ草の色

米沢

深鶴

草庵

南無公孫木鬼柳の一人容

碓嶺

留春の種もつた草庵

武反

可布

松風ふたの葉も音の秋

米沢

庵柳

草の葉も雑作の子や秋の暮

吳山

秋の音もつた草庵

古翠

秋の音もつた草庵

後二

春の種を種平の春の月

比叢の葉もつた竹の秋

東海

さほくの雲の行もつた月

樗来

秋の野を種平の人の通るこ

知兮

明月やさかやけ見もつた梅の花

素律

盆の月もつたぬき草もつた

返り日もつた小窓や柳の影

飛峯

ふたもつた草や野葉もつた秋

柳

口甲

星のねや一振の本サ蔭もまのふや

于ハモカ

左海

松島の枕やあつり天津雁

雪丸

頂上の月名のをそねもあかり危

津カ

玉之

あかむかきふりの休をうか

仙タイ

百詠

旅 五且子

逢ひやうりて舞の秋も稲のを

確嶺

寂上漆山半次久次郎藏書



